

第9回府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和2年12月23日（水）午後1時～2時半

2 場 所 府中駅北第2庁舎 3階会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員13名

岩久保早苗委員、大谷久知委員、乙津俊博委員、佐野洋委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、津田仁委員、友田照子委員、中村洋子委員、長畑誠委員、福田豊委員、藤井孝弘委員、渡辺たき子委員

※木内直美委員、渡邊和子委員欠席

(2) 職員5名

二村文化生涯学習課長、楠本文化生涯学習課長補佐、柏木生涯学習係長、諫山事務職員、山本事務職員

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第8回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会
第7回実行委員会資料（抜粋）

ウ 資料3 第9期府中市生涯学習審議会 答申の方向性の整理について

エ 資料4 基本施策2 答申骨子案

(2) 前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会 第7回実行委員会について

事務局： 資料2は、令和2年12月21日（月）に青梅市役所にて開催された「令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会 第7回実行委員会資料（抜粋）」である。当日は、会長と事務局で出席した。それでは、会長から報告をお願いします。

会長： 皆さんすでにご存知だと思うが、来年度の11月に「関

東甲信越静社会教育研究大会東京大会」が府中市で行われる。前回も説明させていただいたが、通常であれば、2日間の開催で、1日目に基調講演を行い、2日目に分科会を行う予定となっている。しかし、新型コロナウイルスの感染状況によっては、1日目のみの開催にし、分科会は、東京大会としては実施しないという腹案も考えている。また、それと関連して、直接会場には来ることはできないが、参加したいという人たちに対して、オンラインでの開催もできるよう検討を進めている。今回お配りした資料2の中に協賛金の募集のものが入っている。例年、全体の支出の半分以上を、参加者からの参加費とこの協賛金でまかなっている。大学にはすでに依頼をしているが、より幅広い事業体からの協賛金を募るために本格的に動き出すということである。府中市での開催ということもあり、できるだけ地元の企業に出していただきたいと考えている。そのため、皆さんも協力してくれそうな企業等があれば、相談していただければと思う。また、「各市役割分担（案）」という表も資料2の中に入れている。実行委員会市は、ここに書いてある市であるが、府中市は来年度の会長市であるため、全体の取りまとめを行うようになるかと思う。また、当日開催するにあたっては、会場案内や受付などで人手が必要になることや、オンライン開催をする際の金額についても未だに不明な部分があるため、ボランティアを募って協力してもらおうという事も考えていかなければならない。開催まで1年を切っているため、そろそろ本格的に踏み込んでいかなければいけない。

委員： 協賛金の募集は何月ごろから始まる予定なのか

事務局： あくまでも現段階における予定であるが、2月ごろを予定している。新型コロナウイルスの影響で時期が多少ずれてしまう可能性もあるというところである。

5 審議事項

(1) 第3次府中市生涯学習推進計画の具体化に向けて

会長： まず初めに、資料3をご覧ください。この資料をもとに、答申の方向性について整理をさせていただく。審議会への諮問事項としては、「第3次府中市生涯学習推進計画の具体化に向けて」となっており、計画の3つの基本施策のうち、基本施策1と3については、昨年度のうちに

小委員会と全体会を通して、資料3に書かれているような方向性が、すでに示されている。そして、基本施策2について本年度重点的に話し合いを続けている。前回までの話し合いをもとに、事前に皆さまへお示ししたものが、この基本施策2に関する答申の骨子案である。今回は、この基本施策2に対する答申の骨子案について審議し、内容を詰めていくが、基本施策1と3に関する骨子案については次回の審議会までに案をお示しして、次回に審議していきたいと考えている。そして今回と次回の審議を基に全体の答申案を作成して、2月の審議会で皆さんにお示しし、再度審議していただくという流れである。次に資料4についてであるが、こちらが先ほど申しあげた、基本施策2に関する答申の骨子案で、前回の審議を受けて該当箇所を修正したものである。今回はこの中の項目2、3、4について話し合っていきたい。まず、項目2であるが、『学び返し』の新たな展開を進める実行委員会等の設置」としている。内容は、生涯学習センターでは、平成22年度から「市内を中心に講師を発掘し、講座を開催することで地域の『学びたい人』と『教えたい人』をつなぐ役割（『創りたい人』）を担う」生涯学習ファシリテーター養成講座を実施している。「学び返し」の新たな展開を考えるにあたり、生涯学習ファシリテーターの方々の活躍に期待したい。そのための場として、府中市生涯学習センター内に実行委員会等を組織することを提案する。メンバーは、例えば生涯学習ファシリテーターの有志に加えて、地域の課題解決に取り組むNPOの関係者や関心ある公募市民等。具体的な活動としては、生涯学習センターや市民活動センタープラッツ職員等、関係機関の協力のもと、2つの柱が考えられる。1つ目は「地域のニーズに応え、課題解決につながる」講座の把握と分析である。分析するだけでなく、その結果を広報していくことも重要であるが、それは、基本施策3の内容になってしまうため、ここでは書いていない。そして2つ目は「地域のニーズに応え、課題解決につながる」新たな講座の企画実施となっている。生涯学習は広いものであるため、一人ひとりの人生を豊かにするものも非常に必要で、それはどちらかというとも基本施策1の内容になる。この基本施策2では、個人というよりは地域のニーズに応じた講座を設けて、講座を受けた後に、具体的な活動に繋がっていくような講座を

まずは、府中市生涯学習センターで実施したらどうかという内容になっている。今までは、各文化センターをそのような場として利用するという話をしてきたが、そこまで踏み込むのではなく、とりあえずは、府中市全体として地域還元につながるような講座を行い、それから、各地域に広がっていくような方がいいのではないかと考え、このような形になっている。

委員： 「学び返し」について新たに考え、展開していく必要性は理解できるが、課題解決につながるということを強調しすぎてしまうと、本来の「学び返し」が忘れられてしまい、地域の課題解決につながるものだけが「学び返し」になるという捉え方をされてしまうのではないか。例えば、サッカーが得意な人が子どもたちを集めて、サッカー教室を開いたり、英語が得意な人が地域の人たちを集めて、英会話教室を開いたりするのも立派な「学び返し」である。しかし、それらは地域課題の解決とは言えない。地域の課題や困りごとの解決につながらないものは「学び返し」ではないという誤解を与えないような方法を考えていく必要があるのではないか。

委員： 「学び返し」にも種類がある。これまでは、返す内容が個人の生きがいや、楽しみといった教養的なものが大部分を占めていた。ただ、今後はそうした部分も継続しながらそれを超えて、地域の課題や個人の抱えている問題を解決するという方向にも持っていったらどうかという発展的な話になっている。そのため、今の話にもあったように、誤解を与えないようにすることは必要である。そこで、以前にも話したが、「学び返し」に関して「学び返し」の、意義や目的、内容などを記したパンフレットを作成し、配布して誤解のないように伝えることが必要なのではないか。また、項目2の「『学び返し』の新たな展開を進める実行委員会等の設置」についてであるが、読んでみるとファシリテーターが中心となって運営するという書き方になっているような気がする。前回も言った通り、実行委員会そのものは文化センターや府中市生涯学習センターなどを中心にしてその組織の中にファシリテーターやサポーターを入れて、実行委員会のメンバーとして機能させる。ファシリテーターは講座の運営に当たって様々な団体等の調整をしながら進めていくという役割が主たるものであり、企画から運営までのすべてを先頭に立って行うとい

うものではない。資料4の文章を見てみると、そのように読み取れてしまうのではないだろうか。

委員： 「地域のニーズに応え課題解決につながる」という観点はとても重要なものである。しかし、「学び返し」との関係性についてはより考えていかななくてはならない部分があると考えている。「学び返し」には様々な形態があるが、「地域のニーズに応え課題解決につながる」というのは「学び返し」の典型であり、「学び返し」の精神を具現化しているような講座であるということを経験していきたいと考えている。

委員： 地域の課題解決だけが「学び返し」ではなく、従来から行われている「学び返し」も引き続き実施していくということも伝えていくことも必要なのではないか。

委員： 課題の中には地域のものだけでなく、個人が抱えている共通の課題もある。そのため、その両方を見ながら課題解決の方法を考えていく必要がある。例えば、子育ての問題に関して言えば地域にも関係してくるが、個人が抱えている課題である。それを同じ課題を抱えている人たちが集まってお互いの体験や悩みなどを話し合いながら解決の方法を探っていくというような形態になると思う。それから、課題の中身については、行政が行う部分と市民が行う部分がある。例えば行政が行うものの中には、対応が可能なもの、対応すべきだができないもの、行政が気づいていないものに分かれている。我々が課題として取り上げるものは、行政が対応すべきだができないもの、行政が気づいていないものに対して「学び返し」の講座を設け、市民に身近な課題や問題の中から解決できそうなものを取り上げて、話し合っていくという姿勢をとることになると考える。そのため、行政との棲み分けをしっかりと行っていくことで課題をスムーズに発見し解決につなげることができるのではないか。

委員： 個人の課題も扱うとなると規模が大きくなりすぎてしまうため、我々が取り扱うべきものではなくなってしまう。そのため、明確に個人が主体であっても共通する課題を抱えている人たちがいて、そのような人たちを地域で支え合うという趣旨であったという認識でよろしいか。

委員： その通りである。ただ、地域の課題と限定してしまうと個人が抱えている課題を把握することができない。おっしゃったように個人が抱える共通の課題という意味合いで

で発言をさせていただいた。

委員： 「学び返し」という言葉が、まだ市民にあまり浸透していないというのは、以前の審議会に出てきたことである。項目2の「地域のニーズに応え課題解決につながる」という部分はもちろん大事なものであるが、先ほどの意見にもあったように、従来から行われている「学び返し」も大事であることも触れる必要がある。「学び返し」という言葉をもっと親しみの持てるようなものにしていくべきではないか。

会長： 「学び返し」の意味合いを狭くしないというのはとても重要なことである。項目2の中にわかるように文言を加えていきたい。また項目2は(1)と(2)があるが、もしかしたら(1)の方はもっと広くとらえて、府中市で行われている「学び返し」の講座すべてを把握して分析するということでもいいのではないかと感じた。

委員： 「学び返し」講座というのは課題解決につながるようなものと、従来の教養的なものがある。そこで、現在行われている学び返し講座全体をここで改めて把握し、一覧表などにしていくと良いのではないか。

会長： (1)は「地域のニーズに応え、課題解決につながる」というものだけではなくて、広く「学び返し」の講座について把握して分析していくというようにして、(2)の方で新しい展開を目指すためにやっていくというようにした方がいいかもしれない。

委員： かなり複雑になってきているように感じている。先日、社会福祉協議会の集まりに出席した。地域の支えあい協議会が活発に活動しており、すでに7つの文化センターで立ち上がっていて、地域の課題に対して動いているということがわかった。そして、今回の審議会でも地域の課題についての話が出てきていて、社会福祉協議会と生涯学習の地域の課題は一体何が違うのかと感じていたが、やはり違いはある。社会福祉協議会での地域の課題というのはシビアである。例えば、生活保護、新型コロナウイルス後の生活の問題といった経済的で生活に直結するようなものが多い。そうすると、生涯学習とは、と考えたときに、趣味とか余生を楽しむためのものなどといったように、気楽にやってもいいのではないかという思いも強くなってきている。生涯学習で考える時に、運営側が社会福祉協議会と同じように相手の方へのめり込んで暗くなってしまう

という解決の仕方ではなくて、生涯学習で自身も楽しみながら、また自分にも返ってくるといった、「楽しい」という要素が課題の中にもあれば、大きくとらえている課題の中から、何をやらなくてもいいかという部分ができてくれば少しは気が楽になってくるのではないだろうか。

委員： 「学び返し」という言葉に以前より違和感があった。「学び始め」という考えはどうだろうか。海外の事例になるが、高齢の方が小学校に通い始め、子どもたちと一緒に授業を受けるという話がある。さらに、その方は自身も学びながら、学校と連携して、校舎を建てた。これは、「学び始め」であり、「学び返し」にも匹敵するようなものである。楽しみながら、実行性を持って即座に行動することで、実現が近づくということもあるため、違った考え方をしてみるのもいいかもしれない。

委員： 今まで「学び返し」というと、専門的な知識を持った人が、知りたい人に伝えるというのが一般的な考え方であった。それはなぜかという、今までは、その「学び返し」の場が、教養や娯楽といったものが中心であったからである。そのため、「学び返し」を行う人はある程度専門的な知識や技術がないと教えることができなかった。しかし、これから我々が取り組もうとしている「学び返し」というのは、専門的な知識や技術にとらわれることなく集まった人たちがお互いに、自分なりに今までの経験や知識を語り合いながら皆で問題の解決に繋げていく、というような場になる。その場に集まって話し合うということは、お互いに自身の経験や考えを伝えあい、「学び返し」を相互に行うということである。そのため、新たに取り組もうとしている「学び返し」は学ぶことと同時に、自身の体験を通じた知識などをお互いに提供し、交換し合う場になっていくものである。そのような認識のもとに今後も考えていけばいいのではないか。

会長： 今の話は、項目2の(2)に書いてある「ともに学び、その後の活動につなげる」という点と通ずる部分があったかと思う。そのため、文化的あるいはスポーツに関する活動についても、学んだことで自分自身がそこで豊かになることもあるが、やっていくうちに他の人も巻き込んで新しいことを始めたくなる。あるいは、足りないところがあれば、社会に訴えていく必要も出てくるかもしれない。ある意味では、学んだことを極めていくと自然に社会というも

のにつながっていくのかもしれない。そのため、答申については、今までの話し合いで出てきた「学び返し」というものは幅広いものであり、一人ひとりが豊かな人生を送っていけるようになる。しかしその中で、一人では解決できない問題が出てきて行政でも動くことができないものについては、みんなで協力して、解決していくという形で地域社会に還元できるようなことを今後は重視していきたいというような書き方をしたいと思う。

委員： 今の話の答申の書き方について賛成である。我々の検討にある種の特徴を付けるには、このような書き方でなければ、今までの講座編成とどこが違うのかわからなくなってしまいう人も出てくるかもしれない。そのため、現状の(2)の書き方でもいいのではないかと考えている。そしてもう一点お聞きしたいのが、生涯学習ファシリテーターの実際の活動実績についてどこまで把握をしているのかということである。単にそういう人がいればいいという事を文章にして答申として出せばいいというところで終わってしまうような気がしている。その生涯学習ファシリテーターが地域と生涯学習をつなげる機能を果たしているのかということをしつかりと確認しなければ、文言だけで終わってしまうのではないかと懸念がある。その点について会長のご意見もお伺いしたい。

会長： 今年開催していないが、昨年までは、生涯学習ファシリテーター養成講座の発展編を終了した人を対象に、実習のような形で、講座を実施していただくということを行ってきた。その中で過去には、生涯学習をより地域に広げるために府中市生涯学習センターの中でサロンを開催したらどうかということ考えた方々がいた。他にも、講座内で、受講生に今までどのようなことをやってきたかを聞いたりしているが、それぞれの地域で何らかの活動をしている方が多かった印象がある。そのため、現在出ているこの話をすれば協力をしていただけるのではないかと考えている。

委員： 地域づくりにつなげるということが生涯学習ファシリテーターの大きな役割や機能だと思うが、それが実効性を持っているのか、実際にこれまでの生涯学習ファシリテーターの養成が地域づくりをどの程度やってきたかや地域の課題解決にどのような役割を果たしたのかということが見えないと文言だけのものになってしまい、責任の押し付

け合いになってしまうのではないだろうか。

会長： おっしゃる通りである。生涯学習ファシリテーターにだけ頼ってしまうのは望ましくないため、書き方を考える必要がある。一方で、養成後の修了者の活躍の場がないということも言われている。そういう意味でも、この実行委員会というものをその場にしていければということも期待している。

委員： 「学びたい人」と「教えたい人」という点についてであるが、どちらかと言えば「教えたい人」の確保の方が課題であるように感じている。この「教えたい人」の掘り起こしは、生涯学習ファシリテーターと実行委員会のどちらに期待するものになるのか。

会長： 例えば、実行委員会の中で講座の企画実施をしようとしたときに、府中市にはどのような課題があるかについて、実行委員会の中でワークショップを行い、一つのをピックアップして、試しにやってみるという形になると思う。この点についてはまだ詰めていく必要があるかと思うが、府中市にいる人でそのテーマについて経験している方を招いて講師をお願いする。あるいは、外部からの講師、この講師は府中市生涯学習センターや市民活動センタープラットフォームを通じて探すことになると思うし、大学連携という形で講師を招くことは可能であると思う。講師を招くというよりもテーマをしっかりと決めていくということの方が大変になるのではないかと考えている。

津田委員： 先ほども申し上げたように、生涯学習ファシリテーターは講座の企画立案・運営に当たって、自らがその役割の中心となるものではないと思う。企画立案・運営は、あくまでも実行委員会が行う。そして講座を実施する段階になった時に、関係してくる団体や個人をうまく調整する役割が生じ出てくると思う。その調整役として、講座の進行をスムーズに行えるように後押しする役割が生涯学習ファシリテーターに求められていると考える。

委員： そうすると地域のニーズをとらえるというのは別の人たちが担うということになるのか。

委員： その役割を担うのは実行委員会であると考えている。

会長： 今の話を聞いていると実行委員会の役割が大変重要になってくるように感じた。

委員： 「地域のニーズに応え、課題解決つながる」という活動を行う時に、加えていただきたい要素として、府中市でい

うところの自治会連合会がある。自治会連合会とは、町内会の連携や調整を行う団体である。ここは、各地域で抱えている共通問題などをサポートしたりする組織として、リアルな地域の空気を浸透させる場として非常に重要なものであると思う。地域の問題解決でこのような地域生活に密着した場を設けなければ、ただの文章で終わってしまうのではないかという懸念がある。実際に自分自身も地域の活動に加わるようになって、地域の問題はすべて、町内会が第一起点であるという感触を得ているため、ぜひ自治会連合会との協力というのも重要な要素にしていきたい。

会長： 今の話はとても重要なものであったと思う。また、先ほど発言のあった社会福祉協議会との棲み分けという点においても意識しなければならないと思う。自治会連合会の方に寄せることで、そこはクリアできるのではと今のお話を聞きながら思っていたところである。

委員： 生涯学習として取り上げる地域の課題とは何か、その地域というのが自治会連合会で言われているような自治会のエリアの課題ではなく府中市全体の課題であるかもしれない。そのため、地域の課題として個人がバラバラに認識しているものを、もう少しブレイクダウンした状態で細かいところを拾っていくとどのようなものが生涯学習として取り上げる地域の課題なのかがよりはっきりとしてくるのではないだろうか。

会長： 今の話はまさに実行委員会が今後取り組んでいくべきものになるのではないかと思う。色々なものを出したうえで生涯学習として、府中市生涯学習センターで取り上げるべき課題はなにかを絞っていくのが実行委員会の役割になるのではないかと思う。では、続いて項目3についてである。こちらは、より地域に近づいた内容になっている。

委員： 文化センターは、文字通り市民が文化的な活動をする場になっている。しかし、それだけではなくて、地域の問題や課題を解決する場になってもいいのではないか。公共施設の中でもその地域に一番密着したものであり、まさにそのようなことに利用していくことがこれからの文化センターの在り方としては大事ではないかと思う。項目3を見てみると、「場」を作るということしか書かれていないように感じた。その「場」に誰が集まり何をするかということが重要になるため、「場」だけを設定するのではなく文化センターの機能と組織を活用することで、その「場」を地域

問題の解決の軸として生かすという視点を持つことが必要である。それを担う組織として考えられるのが、コミュニティ協議会である。そのコミュニティ協議会の中に、「場」を運営する組織を作ってもらい運営をしてもらう。そうすることで、地域の様々な問題や課題が話し合われるとともに、そこに集まる人々の交流やコミュニティの育成にもつながっていくのではないだろうか。

会長： コミュニティ協議会の活動も地域によって差異があるかと思う。これはあくまでも答申なので、この答申をきっかけに一つの地域でも何か活動が行われればいいのではないかと思う。

事務局： コミュニティ協議会について補足をさせていただく。コミュニティ協議会は各地域の文化センターに存在しており、組織する団体としては老人会や青少年団体や自主グループと言われる団体などで組織している。そして、地域のイベント等を企画し活動していただいている団体である。また、答申の中に盛り込むかという点についてであるが、コミュニティ協議会はコミュニティ協議会として自主的な活動をしているため、そこに対して、生涯学習の立場から、「これをやって下さい。」や「こうでなければならない。」といったことを言うことは難しい。しかし、生涯学習の立場から、「こういう点についてこのように連携していきたい。」といった提案としての形では取り入れることができるかと思う。

委員： 私もコミュニティ協議会に参加している。私が現在参加している地域のコミュニティ協議会は活動が活発で、本来であれば、年間でかなりの数の催しを開催している。以前は別の地域のコミュニティ協議会に参加していたが、やはり地域ごとに活動の活発さや、参加人数には違いがある。しかし、年代を問わず様々な形で交流できる場ではあるので、そういう点において、コミュニティ協議会を絡めていくのはいい事ではないかと思った。

会長： これは新しい提案であるため、今回答申をして実際に動き出してみないと分からない部分が多いが、連携していきたいという内容を加えられればと思う。最後に、項目4についてご意見を伺いたいと思う。今後、新型コロナウイルスのワクチンが開発され、完全に収束するかもしれないし、別の感染症が流行する可能性もあるため、そういったことに対応できる生涯学習を考えていく必要があるのではない

いか。このことに関しては、冒頭でお話した、都市社連協の中でも話題になっており、来年度の東京大会の一つの分科会でも、このテーマになっている。大学でも、実際に対面してやらなくてはいけないことはあるが、オンラインでつながることも良い面があるように感じている。そうした中で、どのような生涯学習ができるのか、今までの同じ会場にみんなが集まって何かするということができない時にどのようなやり方がいいのかを考える必要があるため、みなさんのご意見も伺いたいと思う。

委員： 国民生活白書の中で、地域の問題に対して、解決するために参加したい気持ちがある人がかなり多いというデータがある。しかし、なかなかその活動に参加できないという実態がデータとして出ている。そして、その原因は何かというと、「時間がない」や「参加の仕方がわからない」というものが多かった。それと関係して、地域での協働活動するときに参加者が集まらない、参加すべき人・参加したい人こそが参加できないという課題があった。その時の提案の一つが「ICTの活用」である。つまり、参加の在り方を広げ、新しいつながりで参加してもらおうというものである。実際に、神奈川県の大和市や、藤沢市では、電子会議室を開設して話題になったことがあった。これは、実際には会には参加できないが、オンラインで参加できるようにすることで参加者数が大幅に増加した。そのことを考えると、項目4には「ウィズコロナ時代に対応した」となっているが、これらの話はまさにこの部分にも関係してくることで、参加の輪を広げるという意味もあるかと思う。そのため、「ウィズコロナに対応した」という表現に加えて、「参加を拡大するための新しいメディアの活用」というものも取り入れていただきたいと感じた。

委員： 今の発言の「新しいメディアの活用」という言葉は入れたほうがいいのではないかと思う。以前コミュニティ協議会でアンケートを行い、集計したものがある。その結果を見てみると、今後どのようになればイベントを開催できるかという質問について、収まるまでは開催できないという意見や定員を削減して行うという意見が多かったがオンラインなどを利用するといった意見も出てきていた。定員の削減だと実際に来る人数が減ることになってしまうので、家からでもできるという点は重要なのではないかと感じた。市民活動センタープラッツではオンラインで

配信している講座もあるという話を聞いたので、今後は、そのようなことがより必要になるのではないだろうか。

委員： やはりネットは必須ではないだろうか。参加者が集まらない、時間がないというのは、それに割く時間が取れないということではなく、集まりのある時間行くことができないというのが実際問題である。特に、仕事している世代の人たちは午前中や夕方の集まりに参加できない。そのことを考えると、ネットでいつでも見ることができるなど、関心を高めるためにも、簡単なものでも取り入れることができればいいのではないかと思う。他の地域のコミュニティ協議会のアンケート結果は、違う地域に住んでいると目に触れることはないのが現状のため、そういったところから始めることで、何か気づきがあったり、参加者の輪を広げることにつながるのではないかと思う。

会長： 今のお話を受けて、ICT の活用を答申に取り入れるとなると、それが苦手な方や、環境がない方へも配慮する必要も取り入れなくてはならないと感じた。いわゆる「情報格差を排除しながら」という文言も入れていきたい。

委員： 項目4の「ウィズコロナ」という言葉は、各所で使われているが、あまり馴染みのない表現のように感じた。

会長： 確かに、何気なく使っているが違和感のある表現でもある。「ウィズコロナ」ではなく「コロナ後の」という表記でもいいように感じる。もしくは、本文には新型コロナウイルスと書くが、トップには書かずに、項目4をオンラインの活用というものに変えるというのもいいかもしれない。今回話が出たものを踏まえて、答申（案）として作成をさせていただく。ただ、次回に関しては、冒頭でもお話したが、基本施策1と3の骨子案についての議論になるため、基本施策2に関する話は2月になるかと思うのでご了承ください。

副会長： 公民として生活する我々もいれば、住民として生活する我々もいる。さらに、個人として生活する我々もいる。その中で生涯学習というものは、個人で生活する人たちに対して、自己実現の機会を与えてきたものであったと感じた。しかし、人口減少により問題が顕在化したことで解決策を見出そうとする人や、声をあげる人が出てきたのだと思う。課題が複雑になってきており、なかなか難しいものになってきているが、委員の皆さまの知恵をお借りしながら、より良い答申を作っていければと思う。

7 その他

(1) 次回の開催について

出席委員の都合を挙手にて確認し、事前に確認した欠席委員の都合と調整し、1月28日（木）午前10時～12時で開催することが決定した。